

巻頭言

「夏の訃報」

理事長 新谷 友良

7月25日、中学・高校で同窓だったI君の奥様から訃報が届きました。「7月9日永眠、家族のみで密葬を済ませた」とのこと。死因は書かれていませんが、I君は高校時代から腎臓を患い、大学にもいかず独学で弁護士になりました。そして、20名の弁護士を抱える大きな法律事務所を京都でつくり上げました。高校卒業後離れ離れになったので、久しく行き来がなかったのですが、数年前突然「おまえ、耳が聞こえんようになったと聞いたけど、元気でやってるそうやないか」というメールが来てやり取りが復活しました。そして去年の10月には「かねての計画通り、沖縄に住まいを移す」という手紙が来て、那覇・牧志の新居への招待が書かれていました。

京都の7月は祇園祭、16日の宵山で夏が来ます。中学・高校時代はいつもその日に1学期の期末試験が終わり、開放感からか悪ガキはつるんで宵山に繰り出しました。別段何をするわけでもなく、人混みの中を「しょうもない話」をしながら歩くのがどうしてあんなに楽しかったのか、今思うととても不思議な気がします。私服外出厳禁の学則なので、やむなく全員「せめて祭りらしく」下駄で木屋町の細い道を歩いたら、早速翌日学校の補導部に呼び出され、何かよくわからない注意を長々と受けました。あの中にI君はいたかな、と思いつすのですが、どうも彼の姿はありません。そのころからもう腎臓が良くなかったのかもしれない。

祇園祭が終わっても、京都は蒸し暑く寝苦しい日が続きますが、8月に入ると夏は盛りを過ぎます。15日の終戦記念日が過ぎて、16日の大文字送り火になると、いくら暑くっても夏は終わりです。数えきれない死者の霊が、昼間の熱気が残る町中を一望して山の向こうに帰っていくのですから、夏は終わらなければならない、そんな気持ち強く持ちます。

I君は7月9日に亡くなりましたので、今年は新盆にはならないはずですが、訃報には初七日法要にあわせて四十九日の法要も済ませた、とあります。I君が死んだという気持ちの整理がつかないうちに、新盆で彼を出迎え、送り返すのは慌ただし過ぎます。彼が「沖縄の次にアッチに行くのは計画済みや」ということは分かりきっていますが、来年京都でも沖縄でも構いません、ゆっくり新盆のお迎えをしたいと思いません。